「筑前あさくらの大豆」づくり運動

運動の目標
①単収の向上：10a当たり300kg
②品質の向上：上位等級（1･2等）比率90%以上
③生産履歴の記帳
④GAP（農業生産工程管理）の実施

適期播種、窒素施用で収量アップ

令和7年産　大豆栽培ごよみ

筑前あさくら農業協同組合
朝倉地域担い手･産地育成協議会

月	6		7			8			9			10			11		
旬	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下

生育と主な管理作業

播種期　播種適期　開花期　幼莢伸長期　子実肥大期　収穫期

排水対策　種子消毒　中耕培土①（本葉３枚の頃（播種後15日頃））　中耕培土②（本葉４～５枚の頃（播種後25～30日頃））　防除①（ハスモンヨトウ）　防除②（ハスモンヨトウ　紫斑病・カメムシ）　補正防除（カメムシ）　雑草・青立ち株抜き取り　収穫

万能堆肥　耕起前除草剤散布　基肥の施用　除草剤散布
土壌改良資材の施用

追肥

かんばつ時　うね間かん水・暗渠の栓を閉める

アサガオ・ホオズキ・ホソアオゲイトウの抜き取り

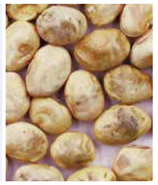
品種特性（福岡県農林試）

品種名	播種期（月日）	開花期（月日）	成熟期（月日）	主茎長（cm）	主茎節数（節）	子実重（kg/10a）	百粒重（g）
ちくしB5号（ふくよかまる）	7.10	8.21	11.1	67	15.6	366	32.4

ハスモンヨトウ卵塊
葉の裏もオレンジ色の綿毛のようなものがついている

白変葉（ハスモンヨトウ）

ミナミアオカメムシ


カメムシによる被害粒

紫斑病による被害粒

ヒロハフウリンホオズキ

アメリカアサガオ

マルバルコウ

青立ち株

＜青立ちの原因＞
落花、落莢、子実肥大停止
①カメムシ
②湿害
③かんばつ

■土づくり

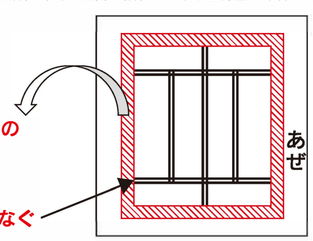
資材名	施用量(10a当たり)	備考
万能堆肥	2t	地力増強・土壌物理性の改善
麦わら	全量	耕起前に硫安10kg/10aを施用（麦わらの分解促進）
塩加マグ55	40kg	大豆に必要なカリ、マグネシウムを含んでいる
e-green 4･4･20	40～50kg	地力改善・カリの補給
ミネラルG	200kg	大豆に必要なカルシウム、マグネシウムを含んでいる
ケイ鉄		
苦土石灰		
生石灰	120kg	酸性障害対策、大豆に必要なカルシウムを含んでいる

①土壌診断に基づき、適正な土壌改良資材を施用する。（適正pH6.0～6.5）
②大豆作付の回数増加により、地力が低下傾向にある。地力増強のため有機物を施用する。（麦わら･万能堆肥）

■排水対策

排水不良田では、生育が著しく不良となる他、播種時期の降雨で播種が遅れ、生育量が確保できない。
そこで以下の排水対策を実施する。
①溝堀機による明渠施工
②うね立て播種
③転作ほ場の団地化

・ほ場周囲に深さ20～30cm程度の明渠施工
・排水口につないでおく
・ほ場内のうね溝もこの明渠につなぐ



■施肥基準

【基肥】

資材名（N・P・K）	施用量（10a当たり）	成分量（10a当たり） N	P	K
ちくごのめぐみ444（14・14・14）	20kg	2.8kg	2.8kg	2.8kg

【追肥】

資材名（N・P・K）	施用量（10a当たり）	成分量（10a当たり） N	目安時期
硫安（21・0・0）	10kg	2.1kg	8月上～中旬

・追肥後、中耕培土を行うと追肥の効果が上がる。

■種子消毒

どちらかの薬剤を使用する。

薬剤名	対象病害虫	処理量
キヒゲンR-2フロアブル	鳥害・紫斑病	種子10kgに対し200mℓ
クルーザーMAXX	鳥害・紫斑病・茎疫病ネキリムシ・黒根腐病	種子10kgに対し80mℓ

■播種基準（適期に播種できるよう作業体制を整える）

播種時期	7/5～12日 播種適期	7/13～20日
条間	70cm	
株間	24cm～21cm	20cm～15cm
播種量（10a当たり）	3.5～4kg	4.5～5kg

播種が遅くなったら立ち本数確保のため播種量を増やす

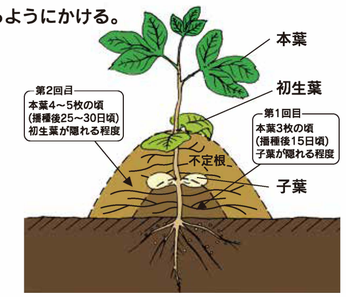
①播種直後の湿害回避のため、うね立て播種を行う。ただし、少雨時には乾燥害を助長する場合がある。
②播種深度は3cmが基準である。播種後に乾燥が予想される場合は、5cmの深めとする。

■乾燥対策

・出芽後に干ばつが予想される時は、暗渠の栓を閉める。
・ほ場が白乾し始めた場合は**うね間かん水**し、ほ場全体に水が行き渡ったら直ちに落水する。長時間のかん水は根腐れ、青立ちの原因となるため、実施しない。

■中耕培土

①土がかかった部分から新根（不定根）が発生し、根粒菌着生の増加・耐倒伏性強化・養水分の吸収力向上につながる。
　＊発根させるために、土は茎にかぶるようにかける。
②溝を作ることで排水性が向上する。
③中耕により雑草防除となる。
※少雨時には乾燥害を助長する場合がある。
※開花期以降は行わない。



農薬適正使用スローガン
1. 散布前に、必ず農薬ラベルを確認！
2. 散布時に、近隣作物や住宅街への飛散防止を徹底！
3. 散布後に、必ず散布器具（タンク、ホース等）を洗浄！
4. 防除履歴は、正確に記帳！

■除草剤使用基準　周辺の水稲、野菜等に飛散しないよう十分注意する。

時期	除草剤名	使用量（10aあたり）		対象雑草	使用時期	注意事項
播種前	ラウンドアップマックスロード	500mℓ	水50～100ℓ	イネ科・広葉雑草	播種前	・低圧で風向きなどに注意し付近の作物にかからないように散布する。 ・ラウンドアップマックスロードは100倍以上で散布する。また、少量散布も可能。（水5～50ℓ）
	バスタ液剤	500mℓ	水100ℓ			
	プリグロックスL	1,000mℓ				
初期	ラクサー粒剤	5kg		一年生雑草（イネ科･広葉）	は種後～出芽前（雑草発生前）	・乳剤は土壌が乾燥している場合には水量を多くする。 ・薬害回避のため、覆土は3cm程度行う。 ・重複散布やムラ散布のないよう注意する。 ・プロールプラス乳剤は、イネ科に長期効果。
	プロールプラス乳剤	500mℓ/水100ℓ				
中期	ポルトフロアブル	200～300mℓ/水100ℓ		イネ科雑草	イネ科雑草3～10葉期	・広葉雑草及びカヤツリグサ科には効果がない。 ・散布前後が低温、寡照であると生育抑制を起こす恐れがあるので注意する。
	大豆バサグラン液剤	100～150mℓ/水100ℓ		広葉	本葉2葉期～開花前	・散布後、曇天、降雨日が続くと効果が劣る。
	アタックショット乳剤	30～50mℓ/水100ℓ		広葉	本葉2葉期～開花前	・薬液がかかった大豆の葉には薬害症状が現れる。

■病害虫防除基準

時期		対象病害虫	液剤体系 薬剤名	希釈倍率 地上散布	希釈倍率 航空散布	粉剤体系 薬剤名	粉剤体系 使用量(10a当たり)
防除①	8月中～下旬	ハスモンヨトウ	ノーモルト乳剤	2,000倍	8～16倍	トレボン粉剤DL	4kg
防除②	9月中～下旬	ハスモンヨトウ	ブロフレアSC（航空散布）又は	2,000～4,000倍	16～32倍	トライトレボン粉剤DL	3kg
			グレーシア乳剤（地上散布）混用	2,000～3,000倍	―		
		カメムシ類	キラップフロアブル	2,000倍	16倍		
		紫斑病	アミスター20フロアブル	2,000倍	16～24倍		
補正防除	10月上～中旬	カメムシ類	スタークル液剤10	1,000倍	8倍	スタークル粉剤DL	3kg

①ハスモンヨトウ防除は、発生消長にあわせて適期に行う。
　白変葉や卵塊の早期除去は、被害軽減に有効である。
②カメムシ防除は、幼莢伸長期から子実肥大期を重点に行う。カメムシは移動性が強いので地域での一斉防除が有効である。
③紫斑病防除は、開花後約1ヶ月頃が適期である。
④液剤使用上の注意：**液剤は100ℓ/10a以上の散布で効果が高まる。展着剤を使用すると防除効果が上がる。**
⑤9月中下旬のハスモンヨトウの防除剤は、ブームスプレイヤー等で**地上散布する場合はグレーシア乳剤を推奨する。**

■収　穫

①コンバイン収穫は、茎が黒くなって「ポキッ」と折れる状態で開始する。
②**雑草や青立ち株は、汚損粒の原因になるので、コンバイン収穫前に必ず抜き取りを行う。**

注）農薬は令和7年4月16日現在の登録状況に基づき記載しています。